

小説 紙の消える日

森山 剛

廣濟堂出版

小説紙の消える日

森林メジャーの謀略

著 者 森 山 剛

発 行 者 川 口 勝 治

発 行 所 廣 済 堂 出 版
〒105

東京都港区芝 2-23-13

電話 03-453-1201(代)

振替 東京8 164137番

印 刷 所 株 式 会 社 廣 済 堂

© 1982 森山 剛

定価は、カバーに明示してあります。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

刊行に寄せて

桐島洋子

森林同盟というグループがある。名前は壮大だが、まだほんの数人の同志が手を結んで身動きし始めたばかりの、ささやかな集まりに過ぎない。そして本著の作者・森山剛氏も、また私自身も、その仲間なのである。

小説の中では女主人公の若杉洋子によって推進されるグリーン・サバイバル運動を、現実のものにしようというのが、グループの主な目的である。逆に言えば、森林同盟のグリーン・サバイバル運動の一環として、まずはこの小説が書かれたのである。

森林同盟のメンバーは、いずれも各分野の第一線で活躍する働き盛りだが、皆それぞれの仕事や生活を通じて、日本の、そして世界の緑の状況に危機感を募らせてきた。私も旅に出る度に、行く先々で眼につく森林の荒廃に胸を衝かれる。また物書きとしては、紙パルプの原料を輸入に依存する日本が、“油断”ならぬ木断^ノによって言論の自由を脅かされることがありはしないかとも不安に思う。一方、海外の熱帯樹林を、金にまかせて根こそぎ収奪する経済大国日本のオゴリに憤る者もあれば、生態系のバランスの崩壊や気象の異常に怯える者もあり、私たちは集まる度に森を憂う議論の密林に踏みこんでしまうのだった。

森林問題は、資源と経済の問題であり、環境や文化の問題でもあり、すべての道がローマに通じるように、現代のすべての問題は緑の危機に繋って行く。もちろん、危いのは森林だけではないが、ともかく地球上で森林ほど文明のしわよせの及びやすい部分はあるまい。樹木の生きざまは、人類の運命の象徴なのだ。

ただ唯一の救いは、石油などちがって、樹木は人間の努力によって育成できることである。緑の恢復

は不可能ではない。これからでも、多分まだとり返しがつくだろう。

世界的な林業会社であるウェアハウザー社は、“This is not for us, not for our children, it is for our grandchildren”という社是を掲げている。「我々が木を育てるのは、我々のためでも、我々の子供たちのためでもない。それは我々の孫たちのためである」というこの言葉は、一企業のポリシーとして読み捨てにはできない重みをもって、私たちの心の深みに響く。そして、私たちは未来の孫たちのために、一体何をしているのだろうかと自問したとき、一同寒々しい思いで顔を見合わせたのである。そこで、ともかく何かできることをしてみようと、グリーン・サバイバル、すなわち緑の生存のためのボランティア活動を志したのだ。

同様の目的を持った組織が、すでにいくつも存在することは承知しているが、森林同盟はその種の枠を外れたマイペースのゲリラ部隊として、メンバー各自の個性や能力を臨機応変に発揮していきたいと思う。トップ・バッターとして、紙バルプ業界に通暁する森山剛氏が、超多忙な本業の合間を縫って書き上げたのが、森林OPECともいえるべき米・加森林メジャー連合の、日本挾撃作戦を想定したスリリングな半未来ドキュメンタリー小説である。

いや、これを小説として推すことにはいささかのためらいもある。樹を見て森を見ないという言葉があるが、本著はむしろ広大な森の展望に忙しく、樹々の陰影を書き込む文学的余裕には欠けるようである。

それだけに、ナマナマしい情報や予測が、新緑の枝葉のようにひしめき合い、溢れるばかりの知識や、みずみずしい刺激を与えてくれる。読者の一人一人が、鬱蒼とおおい茂る森林のオリエンテーリングに参加するような気持ちで本書を読み進み、グリーン・サバイバルの方途を見出して下さることを期待してやまない。

小説 紙の消える日*もくじ

1	森の香り	7
2	獅子と巨象	17
3	森林メジャーの野望	37
4	強者の論理	45
5	シザーズ(鋏)大作戦	58
6	チップショックの波紋	72
7	セントヘレンズ山の神火	80
8	滅びゆく森林	98
9	先細る日本の製紙業	109
10	日本にできて、なぜ?	121
11	アマゾンを狙え!	138

12	浮かび上がるペーパーブロック	150
13	始動するシザーズ(鋏)	164
14	一ブロック紙の悲劇	187
15	出版業界に再編成の波	209
16	石油資本の森林資源買収劇	218
17	燃え上がる森林保全運動	228
18	米国産チップ輸出禁止に	249
19	熱帯樹林保護への世界的運動	273
20	木材版OPECの誕生	287
21	保安林になった海外造林	293
22	揺れる言論の自由	307

1 森の香り

若杉洋子は、時々、物狂おしいほど樹の匂いをかぎたくなる。それは、高揚している時のこともあれば、落ちこんでいる時のこともあるのだが、ともかく、何か生命の本源に関わる呼び声のように思われ、洋子はこの衝動にはできるだけ素直に従うことにしている。

今日もそのために、会社の帰途まわり道をして明治神宮の森を歩き、昏れなずむ樹々の間で静かな深呼吸を繰り返してきた。

信濃町のアパートに帰り着いた時は、もうすっかり夜の帳はおりていた。独り暮らしを始めて七年目になる今でも、洋子は、暗い部屋に踏み込んで自分で灯りをつける瞬間の怯えから脱却することができない。それがいやなばかりに、灯りをつけ放しにして出勤するという友人もいるが、資源問題を真面目すぎるほど真面目に意識する洋子のストイシズムは、そんな浪費を許さなかった。

第一、彼女の怯えは暗闇への恐怖ではなく、朝出かけた時のままの凍結された情景が、パッと照らし出された時に胸を衝く、孤独の実感に対するものなのだ。

脱ぎ放しの寝巻きとか、食べ残した朝食の皿とかに迎えられる気分は最悪だから、洋子はどんなに忙し

くとも、出かける前に部屋をきれいに片づける。そして、読みかけの本と、飲みさしのウイスキーの瓶だけは片づけずに机の上に並べておくのが、彼女の経験が編み出した自己歓迎法だった。

この夜も、まずジャック・ダニエルの水割りをあおりながらソファアに身を沈めて、疲れが引くのを待った。洋子は日本の女性には珍しいバーボン党だった。バーボンの味は、カリフォルニア大学に留学していた時、ルーム・メートのメアリー・ワレカイゼルから教えられたものである。試験勉強に精も根も尽き果てた頃、どちらからともなく立ち上がり、

「そろそろ一杯やらない」

「ライバルを酔いつぶそうってわけか」

などと軽口を叩きながら、バーボンの瓶とグラスを掴み、夜風の爽やかなバルコニーへ出て行くのが二人の習慣だった。官能的な樹の匂いを識ったのも、キャンパスの豊麗な並木に面したそのバルコニーだった。バーボンは森によく似合う酒である。

神宮の森の余韻が、バーボンの香りと融け合って漂う中で、散歩による快い肉体疲労は潮のようにみる引いていく。けれども、仕事もたらした神経の疲れは重く淀んだままだった。

それでも氣をとり直して洋子は立ち上がり、本棚の一隅を占める資料ファイルを繰り始めた。新聞・雑誌は、資料価値のありそうな部分をきれいに切り抜いてから、古紙回収に出すのが、彼女の習慣になっていた。最近では近隣の住民を組織して、定期的に集団回収をやることも軌道に乗せた。こうした合理主義や、市民活動への積極性も、アメリカ時代に身につけたことだった。

彼女のしなやかな指が、一枚の小さな切り抜きを取り出すまでに時間はかからなかった。《ワレカイゼル社の筆頭副社長であるフリリップ・カンドセン氏は、このほど同社を退任し、カナダ・ブリティッシュ

・コロンビア州のカクランクロードル社の社長に任命された。カンドセン氏は五十二歳、法律家で、カクランクロードル社の製品が販売されているアメリカ市場に精通している」

英語でわずか三行のこの記事は、四年前にファイルしたもので、下に彼女の筆で（一九七六年八月十五日付ペーパー・トレイド・ジャーナルから抜粋）と記入されている。「ペーパー・トレイド・ジャーナル」は、アメリカ紙業界の専門紙で、その情報は世界の製紙業関係者の間で重宝がられている。

日本の「ペーパー・トレイド・ジャーナル」ともいうべき紙業専門旬刊紙「ペーパー・ジャーナル」は、南経済研究所から発行されているが、洋子はその記者であった。何事にも取り組んだからには徹底的に打ち込むたちの彼女は、自宅での私的な切り抜き作業にも、仕事に関わりある記事を見逃さず、〈紙・パルプ・森林資源〉という項目を作ってファイルしているのだった。

切り抜きを手にしてソファアに戻った洋子は、再びバーボンのグラスを傾けながら、この三行の記事が語ろうとしていることに心を凝らした。

この半年間、日本の紙業界は、いわゆるチップ・ショックに見舞われ、文字通り右往左往の状態だった。製紙原料であるチップの急激な値上がりである。チップとは、製材工場出る廃材を、チップという機械にかけて幅二・三センチの木片にしたもので、パルプの原料となる。

昨年十二月までは、約一トン当たり五五ドルであったアメリカ産チップが、今年（一九八〇年）の一月〜三月には九二ドルとなり、四月〜六月分については、なんと一三九ドルとなるという通告を受けていたのである。そして目下、日本の製紙メーカー各社の資材担当役員は、パーティを組んで、ワシントン州タコマで輸出先と交渉中であつた。

アメリカ産チップの価格が騰がったとみると、すぐさまカナダの供給者がこれに追隨した。その結果、新聞用紙をはじめとする紙の価格はいつせいに値上がりし、新聞の購読料も七月から大幅に値上げされようとしていた。むろん週刊誌などの値上がりも必至である。

若杉洋子は、あまりにも露骨な値上げ攻勢に憤りを感じる反面、日本側の不甲斐ない交渉態度にもいらだちを覚えていた。

——これではまるでOPEC（石油輸出機構）なみ……、この背後には何かがあるにちがいない——この数カ月、若杉洋子は、その「何か」をとらえようと懸命の努力を続けていたのだった。そんな洋子に、いつでも謎めいてはいるが、核心にふれるようなサゼッションをくれるのは通産省紙業課長の加藤であった。そして今日も、その彼がさり気なく吐いた言葉が気にかかり、神宮の森を歩きながらその言葉を反芻していて、ふと思いついたのがこの切り抜きだったのである。

若杉洋子にとって、この切り抜きに書かれている会社名と人物の名は、いずれもなじみ深いものだった。カリフォルニア大学時代のルーム・メイト、メアリー・ワレカイゼルはここに登場しているワレカイゼル社の社長の娘なのだ。メアリーは、名家の娘といった驕慢さはまったくない陽気で人なつこいアメリカ娘で、洋子と識り合って以来東洋に関心を深め、とりわけ洋子の料理好きに影響されて日本料理の実習に熱中していたものだった。

二人は、水泳とテニスが好きなことでも気が合い、夏休みには、メアリーの家のプールで泳ぎながら過ごすことが多かった。「父はおそろしく厳格なのよ」とメアリーはよく語っていたが、洋子には、ふちの太い眼鏡が長く伸ばしたのみあげによく似合う、優しい紳士に見えた。そして、その父親も母親も、ことのほか洋子を気に入ってくれていた。

ワシントン州のタコマにあるワレカイゼル邸は、大邸宅を見なれたアメリカでもちょっと驚くほどの豪邸で、門から玄関まで自動車^{クルマ}で十分もかかるほど広大な敷地の中にあった。その玄関に通ずる道の両側には、樹齢二百年という、見上げると首が痛くなるほどのダグラスファーが立ち並んでいた。洋子が、日本名で米松と称されるこの木を初めて見たのは、このメアリーの家であった。その後、ワシントン富士といわれるセントヘレンズ山へドライブした時、その山一帯がダグラスファーで覆われているのを目のあたりにし、それがアメリカ北西部に大きく分布している松であることを知った。その時、

「あの山の大部分は父の会社のものよ。アメリカ国内で六百万エーカーの森林を保有しているんですって」

というメアリーの解説を聞き、まざまざとアメリカ森林経営者の実力を知らされたものだった。

「出身はドイツ。父の曾祖父が偉かったらしいわ」

誇らし気に言うことのないメアリーは、家系についてもそれ以上説明しなかった。

洋子が、切り抜きに出ているもうひとりの名前、フィリップ・カンドセンに紹介されたのは、メアリーの家で催されたパーティの席上だった。度の強い眼鏡をかけた、柔和な微笑を絶やさないう小柄な紳士で、ゆっくりとした話し方に特徴があった。メアリーの父親とは、きわめて親しいらしく、彼女がメアリーの家に滞在する度に会っていたような記憶がある。今でもカンドセン氏に感じている好ましい印象は、多分、「息子がいれば、貴女のようなキューートな女性と結婚させたいのですかね」という言葉に負っているところも多いだろう。

メアリーの父親、ジャック・ワレカイゼルが、アメリカ財界の大立物で、世界の八大石油メジャーズのひとつであるソーカルの重役でもあり、また世界的航空機メーカーであるボーイング社の重役でもあるこ

と、そして出身がドイツ系ユダヤ人であることを知ったのは、卒業間際、ペイルートから留学しているクラスメートから知らされたことだった。

若杉洋子がカリフォルニア大学を卒業して日本に帰ってきたのは、一九七四年、二十三歳の時だった。帰国して、まず洋子が直面したのは就職難である。

前年の春に、国際通貨が固定相場制から変動相場制に移行し、さらに秋には石油ショックに襲われたこともあって、日本経済は先行き不安のまっただ中にあり、多くの企業は採用を手控えていた。それだけに、ただでさえ狭い大学卒女性の就職の門は、ほとんど閉ざされたような状況だった。

俗に、一九六〇年代のアメリカ社会をブラックパンサーの時代、一九七〇年をピンクパンサーの時代というが、洋子が留学中の六〇年代後半から七〇年代にかけては、ウーマンリブ運動が燃え盛っていた時期だった。社会進出する女性が大変な勢いでふえ、それはあらゆる職種におよんでいた。

そのような社会で学生生活を送ってきた洋子にとって、キャリアウーマンの道を歩むことは当然のことだった。しかし、日本とアメリカの差は、あきれるほど大きかった。女性であるということに加えて、半ば外人扱いの外国大学卒業生であるという二重のハンデを負った洋子に、一流企業への就職はまったく絶望的だった。

つらい就職の秋が過ぎていった。都内で病院を経営している父親は、改めて娘を留学させたことを悔い、「お前は器量も悪くはないんだから、若いうちに結婚したほうがいい」としきりに言うようになった。

たしかに、高校時代は八千草薫に似ていると言われ、男生徒がよくやる校内の美女定めでは、いつもナンバーワンだった。アメリカ時代にもよくデートを申し込まれたものだった。むしろ男嫌いというわけで

はない。しかし、結婚する場合には、妻や母としての役割だけでなく、キャリアウーマンとしての生きかたを認めてくれる相手でなければと考え、まずキャリアウーマンとして自分を確立したいと願ったのである。

そうしてめげることなく就職運動を続けた結果、やっと辿り着いたのが南経済研究所だった。

「経済研究所といっても、紙業界の専門紙を発行している会社です。なぜ紙業界に関心があるのですか」と口頭試問で問われた時、大学時代の親友であったメアリー・ワレカイゼルを通じて知ったアメリカの森林経営者の存在について語ったことが、合格の鍵となったことは、後に南社長から聞かされた。ワイカイゼル社が、日本の紙業界にとってきわめて大きな影響力をもつ存在であることを知ったのは、うかつにも入社後だった……。

南経済研究所は、かつて著名な経済誌の編集者をしていた南社長が設立した研究所で、その社長の哲学ともいうべき、ものの見方、考えかたを反映した「ペーパー・ジャーナル」の記事・論説は、独特の味とあいまって業界からは高い評価を得ていた。

「長期的な問題に、世界的な視野で照準をあてること」というのが編集方針であり、編集の姿勢としては「数字で裏付けられない分析はダメ」「現象の背後に何があるかを見抜かなくてはダメ」「日本だけを見ていてはダメ」ということがきびしく求められた。

入社した記者は、南社長から徹底的に鍛えられるのが伝統で、原稿は何回となく書き直しを命じられる。洋子も入社数年後まで、この三ダメ方式の洗礼を受けた。自分ではよく書けたと思う記事も、何度となくつり返され、ボツにされ、独り涙をこぼすどころか、記者としての才能に見切りをつけて辞めようと思ったことも、一度や二度ではなかった。

しかし、そんな苦しみを経ているうちに、どうやら一人前になり、最近では有能とさえ見てくれるような雰囲気を感じるようになった。

メアリーを通じてアメリカの森林事業に触れているせいか、洋子は職業柄という以上に森林問題に深い関心を抱いていた。そして、紙と森林資材の相関関係がわかってくればくるほど、のんきな日本の現状に危機感を抱かざるを得なかった。

一九七三年の石油ショックが起こるまで、日本人は、石油は無尽蔵にあり、低廉なものだという固定観念に支配されていた。それと同様なことが、森林資源を原料としている紙についてもいえるように思えるのだった。

日本人には「紙は安いもの」という意識が抜き難くある。「紙は文化のバロメーター」と、紙の消費の増大を当然のように考えているふしもある。その意味では、昨年来のチップショックによる価格の高騰は、そうした意識に変革を迫るものといえるだろう。

しかし、あの石油ショックの洗礼を受けながらも、「灯油は安いものだ、いや安くあるべきだ」という消費者の意識はなかなか変わらなかった。だからこそ、灯油価格は行政指導で低く抑えておくべきだという政治的圧力も長い間続いたのである。そのため、価格体系はいびつになり、かえって省エネルギーの足を引っばったものだった。

たしかに、その行政指導を廃止し、灯油価格をプライス・メカニズム（需給状態を反映して価格が変動する仕組み）に委せた直後は、消費者から全国的に反対の声があがった。しかし、いまやそれが一二〇〇円になっても消費者は受け入れているし、また節約も進んでいる。

そして今日、日本人の多くは石油は高いものだという意識を持ち始めている。イラン革命によって原油